

教育研究所年報

第 35 号

2026

文教大学教育研究所

教育研究所年報 第35号

目 次

2025年度 事業報告

事業報告	3
定例研究会報告	4
第31回「世界の教科書展 特集：エジプトの教科書」	8
〈学外巡回展〉	
世界の教科書展：文教大学教育研究所コレクション	9
諸外国の教科書収集	10

2026年度 事業計画

事業計画	12
------------	----

2025年度事業報告

<研究部> 研究部主任 萩原 敏行

1. 「世界の教科書展」の実施

(1) 「ベトナムの教科書展リバイバル公開」を、5月21日(水)～26日(月)に文教大学越谷図書館にて開催。期間中の24日(土)には会場にて、小池拓也氏の公開ミニ講座も行った。

(2) 第31回「世界の教科書展 特集：エジプトの教科書」を、文教大学越谷校の学園祭（藍蓼祭）中である11月1日(土)～3日(月)に12102教室にて開催。2日(日)には会場にて、就実大学教育学部の内田直義氏の講演「エジプトの社会・文化・教育」を行った。

(3) 巡回展を、12月3日(水)～12月10日(水)に「OKEGAWA hon+」（桶川マイン）にて開催した。期間中の7(日)には内田直義氏のミニ講座も行った。

2. 『教育研究所年報』第34号の発刊

『教育研究所年報』第34号を5月に発刊した。世界の教科書展、定例研究会の報告といった前年度の活動報告および今年度活動計画を中心に掲載（全11頁）。

3. 客員研究員の受け入れ

国内の学術機関（他大学を含む）から計13名の客員研究員を受け入れた。

4. 「定例研究会」の実施

2025年度は年3回、8月9日(土)、11月1日(土)、3月7日(土)に「定例研究会」を実施した。（通算第108回～110回）

5. その他

海外の教科書収集、そのデータベース化、教科書研究センターとの共同企画の準備など。

<研修部> 研修部主任 小林 稔

1. 『教育研究所紀要』第34号の発刊

『教育研究所紀要』第34号を発刊した。特集テーマは「教育DXの現状と課題」とし、依頼論文3編を掲載。自由研究では、研究論文9編、研究ノート1編、実践研究1編、実践報告1編という内容であった。

2. 『教育研究所ニュース』54号の発刊

『教育研究所ニュース』54号を11月に発刊した。巻頭言を「約90年前の子どもが記した（體育簿【體育計畫】）」とし、世界の教科書展「エジプトの教科書」の報告、海外の教科書所蔵一覧、桶川市〈世界の教科書巡回展〉と2025年度「定例研究会」のお知らせ、『文教大学の授業』の執筆者紹介を掲載した。

3. 『文教大学の授業』92、93、94、95号の発刊

第92号「体育科教育法—令和版『楽しい体育』を实践する教員養成をめざして—」（教育学部 小林稔）、第93号「ウェルネスライフの实践と“生きがい感”—こころの健康=健幸から考える—」（人間科学部 宮田浩二先生）、第94号「ゼミナールI・II 多様な仲間との協働、挑戦を通じて、ともに成長する」（経営学部 首藤洋志先生）、第95号「給食経営管理実習を通して『食べる楽しみ』を考える」（健康栄養学部 長瀬香織先生）。

4. 教育研究所ホームページの運営・更新

前年度までと同様、教育研究所の各事業終了後は、速やかに研究所ホームページに掲載する情報の更新を行い、本研究所の事業報告を広く社会に発信することに努めた。

各コンテンツの整備と発信内容の精査、積極的な情報発信に力を入れていく。

5. 刊行物「学校のいま」の発刊

昨年度の事業計画の中に記していた刊行物「学校のいま」の発刊に関しては、教育研究所紀要における実践報告等で代替することが可能との判断から、教育研究所紀要の中に随時組み込むこととなった。

定例研究会

教育研究所所長 手嶋 将博

本年度の定例研究会は、2025年8月9日（土：第108回）と、2026年3月7日（土：第110回）にオンライン方式で、また、2025年11月1日（土：第109回）藍蓼祭1日目に越谷校舎12103教室にて対面方式で実施した。第108・109・110回となる定例研究会の報告題目と発表者は下記の通りである。

本研究所が定期的に行う定例研究会は、本学の教職員、学部生、大学院生をはじめ、本学を卒業・修了したOB・OGや現役の教員など、学内外を問わず誰でも参加、聴講、質疑応答ができる場であり、教育に関わる幅広い研究の推進とそれに基づく社会的貢献を果たすとともに、教育・教育現場をめぐるさまざまな状況の変化に応じて、常に新しい情報や知見を発信していくことを目的としている。



第110回(3/7)定例研究会の様子

2025年度定例研究会発表要旨

第108回 2025/8/9（土）13:00～15:30

**「本を他者に紹介する」活動が持つ可能性
～ビブリオバトルとブックトークの比較を通して
綾 牧子（学研アカデミー保育士養成コース）**

これまでのビブリオバトルに関する授業実践研究をもとに、ブックトークの授業実践と比較することで、それぞれの特徴を明らかにし、今後の実践への示唆を得ることを目的とした。ビブリオバトルもブックトークも、ともに「本を他者に紹介する」活動であり、同様の機能を持っている。そのため、両者ともにアクティブラーニング的な活動として取り入れることができる。また、ブックトークは遊びの「競争」の要素がないため、ビブリオバトルよりも取り入れやすい面があることが示唆された。

多文化共生社会の創造に向けた生涯学習の在り方—実践方法の考察—

阪本 陽子（台東区教育委員会）

多文化共生の領域で、様々な学習機会が作られるが、生涯学習の視点から、とりわけ、社会教育フィールドでどのような学習機会を創出することが求められるのか実践を通して検討した。現在の状況において求められるのは、「支援」や「交流」を軸にする学びではなく、「共生することの意味」と向き合うための学びである。これからの日本の社会を考えた時に、否応なく外国人とともに生きる社会がやってくる。その社会の在りようのなかで、誰もが「リテラシー」を身に着ける必要があり、「多文化共生のリテラシー」に注目する必要性に注目した。

**豊かなかわり合いの中で、今と未来に生きる
—学ぶ喜びを実感し、自ら学び続けようとする児童の育成—**

清水香保里（川越市立川越小学校）

本発表は、本校の高学年算数科少人数教室へ通う児童の実態を分析し、学習が向上するための手立てを見つけ出すことを目的に行った。実態把握として、テストの知識・技能面と授業内の発言回数、ノート記録の内容についてそれぞれ集計した結果、①知識技能が高く発言が多い、②知識技能は高いが発言が少ない、③知識技能は低いが発言が多い、④知識技能が低く発言も少ない、の主に4つに分類した。タイプ別に支援する手立てを検討したものを実践し、更なる整理・分析を重ねる必要がある。

基礎教育の保証

～大学の情報基礎教育は変わらなくてよいのか 情報モラルの観点から～

矢作 由美子（中央大学通信教育部）

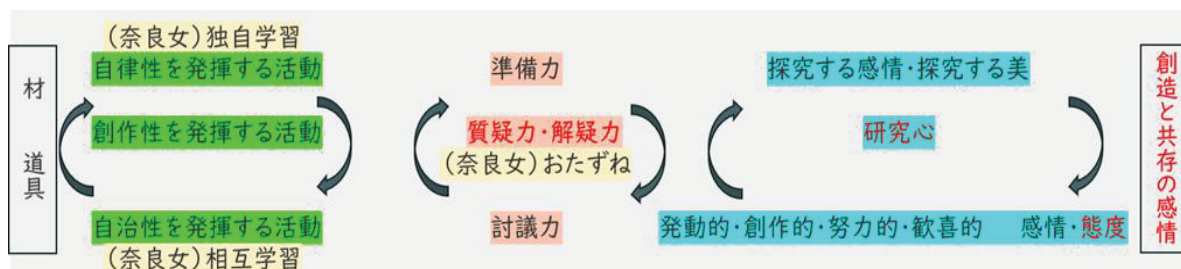
大学をはじめとする教育機関における SNS リテラシーや情報リテラシーなどの育成は、ますます重要な課題となっている。そこで、昨年、「SNS の交流アプリを利用したトラブルに関するアンケート調査」を実施した分析結果から、「好意ある人から」だと、「断ることの難しい」が示された。大学入学時の広報、啓発・注意喚起に「断る勇気について」含める必要があることを提案した。

第 109 回 11 月 1 日(土)13:00～16:00

質の高い深い学びの実現化を支える要素

小幡 肇（元・文教大学教育学部）

本研究は、解決の手がかりを木下竹次「自律的学習法における質疑・解疑」と重松鷹泰「創造と共存の感情」に求めた。そして、奈良女子大学附属小学校「しごと」学習を事例に、子どもが「おたずね」を駆使する「質疑力・解議力」を中核として、独自学習の準備力及び相互学習の討議力を培うことが子どもの研究心を高める「質の高い深い学びの実現化を支える」要素となるとした。



**就学前教育と小学校教育とのカリキュラム接続の研究
— 1990年代における幼保の変容と小学校教育との接続 —**

梨子 千代美（彰栄保育福祉専門学校）

わが国の1990年代の幼稚園と保育所（以下、幼保）の関係に焦点をあて、その背景と幼保の関係の変容プロセスについて、保育政策の歴史的な展開を追いながら整理した。少子化の進行で、“幼稚園の保育所化”の傾向が見られ、行政改革等を背景に幼保の教育面での共通化の強化と施設の供用化等の弾力的運営が推進された。従来の幼保の社会的機能の差異を確認し、二元的制度を維持してきた関係は、自治体レベルにおいては二元的制度を超えた柔軟な関係へと再構築された時期であった。

特別支援教育における食農教育の研究Ⅲ

木場 雪香（越谷市立荻島小学校）

質問紙調査から、現在特別支援教育の場において、90%程度農作物を育てる学習に取り組んでいた。農に取り組んでいる教科としては、70%が生活単元学習にて取り組まれていた。夏の方が多くの種類の農作物を育てており、夏はナス科、冬はアブラナ科の農作物を育てていることが分かった。また、今回の回答者全員から農作物を育てる学習をしていて困ることがあると回答しており、農家や農業の専門家とコラボした食農教育の必要性も示唆された。

本気で Agency を育てるには？～探究と体験の場が果たす役割～

三首 洋輔（探究と体験の場 種をまく）

本実践は、自ら行動できる力「Agency」の育成を念頭に置いている。日本の児童は主体性に課題がある現状を踏まえ、体験プログラムを通じた児童の変容を分析した。実践の見取りから、自ら意思決定する「自分で決める」、対話と協働を図る「仲間で協力する」、試行錯誤を促す「失敗から学ぶ」の3視点において Agency の発露が確認された。結論として、体験と探究の往還を伴走者が肯定的に支えることが、Agency を育む上で有効であると示唆された。

第110回 3月7日(土)13:00～16:00

フィクションにおける教師像の分析枠組に関する研究

— 熱血教師と伴走する教師像 —

大西 健介（共栄大学教育学部ラーニング・ラボ）

本研究は、ドラマ・アニメ・ゲーム等のフィクションに描かれる教師像が、社会の教師観形成に与える影響を検討するための分析枠組みを提示した。学校がフィクションの舞台となりやすい要因を整理し、フィクションにおける教師像を4類型に整理した。さらに、視点操作・時間圧縮・倫理の単純化・代理救済という特徴を抽出し、媒体による描写傾向の違いを論じた。今後は1970～2020年代作品を対象に類型の精緻化と、教員の専門性概念との統合を課題とする。

自立的な学びの実現に向けた、初任教師の学習指導の模索

—子どもを「見る」ことを通して—

津村 優里菜（市原市立八幡小学校）

本研究では、子どもの自立的な学びを生み出す授業の在り方を検討し、初任教師が子どもを「見る」経験を通じて、自身の指導観を形成・更新した軌跡を描写した。授業において、子どもが自己調整・自己決定・自己調整する学習過程を組み込むことで、自立的に学んでいく子どもの姿が顕在化したことが成果である。今後は、この実践を持続させるため、学校の組織的支援と、教師の力量形成の両面から検討を深化させることが課題である。

日本人の学びについての〈再〉検討

日本人の学びの将来像～学びの「主体性」と導く「専門性」の明確化のために～

青木 大輔（社会構想大学院 大学実務教育研究科）

発表者の関心は「生涯学習」から「実務教育」へ推移してきた。今回の発表は、「専門的教育職員」を通じた実務教育研究と現時点での専門職学位論文の構想のうち、「専門性」と「主体性」との関係を探究するための基礎部分を築くものである。現在日本人に求められている主体的な学びは、特に「主体性」の概念に関する整理が途上にあることが先行研究等から明らかであり、学びを導く側においても「主体性」が前提となった「専門性」が必要となることを指摘したものである。

米国の地方自治体（カリフォルニア州サンノゼ市）による芸術文化（パブリック・アート）プログラムを事例とした「コミュニティ・モデル」概念の検証

丸山 悦子（文教大学・非常勤講師）

米国で博物館や芸術文化施設は都市や地域のイメージアップを担う重要な媒体と見なされる。一方で、住民の多様なエスニック構成を考慮した公的資源として位置付けられることも多い。本発表では、市の一定予算を文化事業に当てているカリフォルニア州サンノゼの事例に焦点を当て、同市で展開される公共芸術プロジェクトを概観した。具体的には特定のエスニック・グループに特化した歴史展示や文化イベントが博物館研究の理論モデル *interpretive communities* のどれに当てはまるかを検証した。



第 109 回(11/1)定例研究会の様子

第31回「世界の教科書展 特集：エジプトの教科書」

2025年11月1日(土)～3日(月)

研究部主任 萩原 敏行

実施状況

1994年度から開催している「世界の教科書展」は、教育研究所の特色ある取り組みのひとつである。1997年度の第4回の教科書展からは、越谷キャンパス学園祭（藍蓼祭）で開催してきた。原則として、ある地域の初等教育（小学校）の主要科目の教科書を展示し、教育制度や教科書の内容を紹介している。回によっては、研究所で協議を重ね、方針を変えた年もある。たとえば、特定の教科（英語など）に焦点をあて、その教科の教科書を複数地域で比較したこともある。コロナ禍におけるオンライン開催などを経つつも、来場者と意見交換しながら研究や教育を促進する場として教科書展は発展してきた。

2025年度の教科書展のテーマは「エジプトの教科書」とした。近年の日本においてエジプトの教科書を学ぶことにはさまざまな価値があった。

まず教育的観点では、日本政府と共同で進められている「日本式特別活動」（掃除、学級会、当番活動など）が注目を集めている。知識偏重からライフスキル重視への転換、イスラム的価値観や共同体意識を重視する教育と日本の「個の尊重」を重んじる教育の比較など、自国教育を相対化し見直す契機となったのではなかろうか。

他にも、教科書の挿絵や文章から伝わる宗教観や家族観に加え、右から左に進んでいく言語表現は異文化理解を深め、アラビア語のユニークさを学ぶ教材としても有益であった。

エジプトは中東・アフリカを結ぶ要衝であり、日本が今後交流を深める上で相互理解の基盤となる。日本で増加するイスラムの人々を理解し、今後の日本社会におけるイスラム文化との共生に必要な観点や相互尊重の姿勢を考える一歩として、今回の展示が大変意義のあるものになった。なお、会期中の2日(日)には、就実大学教育学部の内田直義氏による講演会「エジプトの社会・文化・教育」が展示会場にて開催されている。

このような教育研究所の貴重な資料を公開する機会を増やすため、2016年度から学外にて巡回展を行っている。また、2024年度からは本学内でもリバイバル展をはじめた。原則、前年度の教科書展をコンパクトに再現するものである。公開の機会を増やすことで、より多くの方たちに研究所の活動を紹介していきたいと考えている。

国際情勢の中で生きる時代において、この企画を発展させるための工夫も引き続き検討していきたい。さらに学生たちに関わってもらいやすい教科書展の運営方法も検討し、皆で作り上げていくという教科書展の伝統を引き続き守っていきたい。



世界の教科書展：文教大学教育研究所コレクション —特集 エジプトの教科書—

日時：2025年12月3日（水）～12月10日（水）

会場：「OKEGAWA hon +」（桶川駅西口駅前桶川マイン3階）

共催：桶川市、丸善雄松堂株式会社

研究部主任 萩原 敏行

実施概況

教育研究所は「教育に関わる幅広い研究の推進とそれに基づく社会的貢献」を目的とし、内外の研究者の協力のもとに様々な研究に取り組んでいる。なかでも、越谷校舎の学園祭で開催される「世界の教科書展」は教育研究所の特色あるイベントである。

その研究成果を地域の方たちに還元すべく、2016年度から、桶川市、丸善雄松堂株式会社（教育・環境ソリューション事業部）、文教大学の三者共催で学外巡回展を行っている。パネル展示で当該地域の教育の一端を紹介することに加え、様々な教科の教科書の実物展示や識者のインタビュー動画、ミニ講演会などの内容は、学内外からの好評を得ている。

2025年度は、エジプトの教科書を展示した。パネル展示は全期間、教科書の実物展示は期間中の週末、12月6日（土）・7日（日）に行った（10時～16時）。この二日間の来場者数は150人に迫り、熱心に教科書に見入る多くの方々の姿が見られた。

また、12月7日（日）は、就実大学教育学部の内田直義氏によるミニ講座が開催された（テーマ「エジプトの社会・文化・教育」）。用意した席はほぼ満席となる盛況さで、講座終了後も、質疑応答が続き、エジプトに対する関心の高さがうかがえた。

教育研究所では世界各地の教科書を収集し、保管してきた。2017年度には、モラロジー研究所から教科書の寄贈を受けたこともあり、貴重な資産をそろえることができた。およそ30か国・地域の教科書を保有し、その数は約1万冊に達している。世界の教科書の収集・管理、および教育研究活動への還元という地道な活動を長年継続している研究機関は国内でも珍しいと言われている。そのため、メディア関係者や他の研究機関からの問い合わせも増えた。2026年度には「公益財団法人 教科書研究センター」との共同イベントも企画されている。今後も、このような貴重資料の活用方法、社会への還元方法について引き続き検討を重ねていく。

こうした試行錯誤の連続が「教育に関わる幅広い研究の推進とそれに基づく社会的貢献を果たす」という研究所の理念に近づくと信じ、引き続き努力していきたい。



諸外国の教科書収集

教育研究所では、設立当初より海外の教科書を収集してきた。収集した教科書は「世界の教科書展」に展示し、近年はマスコミからの問い合わせや取材依頼も多い。

1. 初等学校（計 28 カ国 2,297 冊）

（2026年3月31日現在）

国	教科	国語	社会	算数	理科	生活科	総合科	音楽	美術	体育・健康	実科	英語	日本語	道徳・宗教	情報	国際理解	その他	計（冊）
アメリカ		42	16	46	8		5										3	120
イギリス		20	12	8	12										10			62
イタリア		30	16	16	7		7	3				18		7			23	127
インド		141		5			10			7				9	15			187
インドネシア		6	12	6	6			6	2			6		6			6	56
エジプト		19	9	10	6	20						16		20				100
オーストラリア		60	7	23	18			6	10	6			3	3		1	7	144
オランダ		2	3	6	6							1					2	20
韓国		26	14	23	16	10		4	4	8	2	6		10			8	131
ケニア					3													3
シンガポール				23	13					6		5						47
スイス		2		1														3
スペイン		6	4	6	6		4					6		7	2		1	42
スリランカ		7		5								6		6				24
タイ		12	6	7	6	1	1	2	6	6	6	6					6	59
台湾		21	14	22	14	6	20		22	21		20						160
中国		10	11	16	15			6	5			44		6			1	114
ドイツ		8		11		20	4	2	3			17		3				68
トルコ		10	10	9	2	5		6				15		9	1		12	79
バングラディシュ		5		3								1					3	12
フィンランド		28	7	26	18							13						92
ブラジル		10	9	9	9			5				5		11			6	64
フランス			10	7								20						37
ベトナム		14	4	8	6	2		5	5	3	2			4			2	55
ポーランド		4	8	8	4		2	3	6			6			12			53
マレーシア		36	6	33	22	7		3	5	15	3	33		24	3		15	205
ラオス		10		10		10			5	5		6					5	51
ロシア		51	1	27	3	26		4	9	4	11	36			7		3	182
計		580	179	374	200	107	53	33	86	87	30	286	3	125	50	1	103	2,297

2. 中等学校(前期・後期) (計 17 カ国 818 冊)

(2026年3月31日現在)

国	教科	国語	社会	歴史	地理	公民	数学	科学	生物	化学	物理・地学	音楽・美術	体育	家政・技術	外国語	道徳・宗教	情報	その他	計(冊)
アメリカ			1	1	1					2								1	6
イギリス		8	8	3	3	2	4	6	1	1	1	2			2		2		43
インドネシア		3	3			3	3	3							3	3		3	24
韓国		5	2	2			3	3				4	2	3	5	2		3	34
シンガポール				3	7		3		1	4	2			2	4				26
スペイン		5		2	3	1	5	2	1		2	1	4	3		4			33
タイ		8	4				10	1	1	1	2	2	2	6				3	40
台湾		9	21	3	3	3	14	26	1			9	10		16			10	125
中国		9		16	8		10		6	5	7	8			11			1	81
ドイツ		3	2	31	9		8	2	3	2	2	5		1	8		2		78
トルコ		12	2	2	4	1	9	4	2	1	2	2	1		3	10			55
ネパール							1	1							1				3
フィンランド		3	4	3	3		6		5	1	1	4	1	1	6	1		1	40
フランス		3		2	1		2								20				28
ラオス		14		7	7	7	8		3	3	3		1	8	18			15	94
ロシア		15	6	9	4		8		4	4	3	10	3	2	5	6	2	6	87
ポーランド		2	1	2	2		2		2	2	2	2					3	1	21
計		99	54	86	55	17	96	48	30	26	27	49	24	26	102	26	9	44	818

3. 公益財団法人モラロジー研究所からの受贈コレクション (計 18 カ国 7,249 冊)

2017年、公益財団法人モラロジー研究所の施設建て替えにともない、18カ国7,249冊にも及ぶ教科書の寄贈を受けた。諸外国の教科書は、以下のとおりである。

国名	受贈冊数	国名	受贈冊数
アメリカ	1,489 冊	ドイツ	760 冊
イギリス	735 冊	旧東ドイツ	48 冊
イタリア	497 冊	旧西ドイツ	256 冊
カナダ	266 冊	ロシア	39 冊
スウェーデン	81 冊	旧ソ連	280 冊
スイス	150 冊	韓国	549 冊
スペイン	150 冊	中国	832 冊
フィンランド	97 冊	香港	236 冊
フランス	616 冊	台湾	168 冊

2026年度事業計画

<研究部>

研究部主任 萩原 敏行

1. 「世界の教科書展」の実施

(1)5月のリバイバル公開（エジプトの教科書）を越谷で、(2)越谷校舎学園祭（藍蓼祭）期間中の「世界の教科書展 特集：イタリアの教科書」にてパネル、教科書の展示、京都産業大学文化学部の宮坂真紀氏の講演会の開催、(3)12月に巡回展を「OKEGAWA hon+」（桶川）にて開催予定。また、並行して2027年度開催予定の「世界の教科書展 特集：ポーランドの教科書」に向け、教科書の収集、パネルの作成、講演者との調整などを行う。

2. 『教育研究所年報』第35号の発刊

2026年5月に刊行（本誌）。世界の教科書展、定例研究会の報告など、前年度の活動報告および今年度活動計画を中心に掲載（全13頁）。

3. 客員研究員の受け入れ

国内の学術機関（他大学を含む）から17名の申請者があり、受け入れを承認した。

4. 「定例研究会」の実施

3回（8月8日、10月31日、3月6日・通算第111、112、113回）を実施予定。開催方法や実施回数に関しては、参加者の増加といった事情をふまえ検討していく。

5. その他

5月23日（土）に文教大学越谷図書館が会場となる「共益財団法人 教科書研究センター」設立50周年記念共同イベントの開催、収集した海外の教科書のデータベース化など。

<研修部>

研修部主任 小林 稔

1. 『教育研究所紀要』第35号の発刊

『教育研究所紀要』第35号の特集テーマは4月の研究所会議にて正式決定し、5月中旬に、特集テーマに関する論文の依頼、および投稿論文等の募集を開始する。なお、原稿の締め切りは9月下旬で、2026年12月に発刊を予定する。

2. 『教育研究所ニュース』55号の発刊

本研究所の事業の進捗状況や活動の報告を中心に、学内外にそれらを啓発していく広報誌としての役割を担う本誌は、5月に『教育研究所年報』が出る関係から、2018年度より年1回の発刊となり、2026年度は11月に発刊を予定する。内容の詳細については、4月の定例の研究所会議にて決める。

3. 『文教大学の授業』96、97、98、99号の発刊

引き続き、文教大学の教員の授業を学内外に紹介していく。従来通り、これまで執筆されていない先生に依頼することから、2026年度は、教育学部藤森裕治先生（5月・第96号）、文学部野村忠央先生（7月・第97号）、情報学部櫻井淳先生（10月・第98号）、国際学部千葉克裕先生（1月・第99号）に執筆いただく予定でいる。

4. 教育研究所ホームページの運営・更新

各コンテンツの整備と発信内容の精査、最新情報の更新を実施するとともに、既存コンテンツのブラッシュアップを積極的に行っていく。

2025年度

所長	手嶋 將博		
研究部主任	萩原 敏行		
研修部主任	小林 稔		
事務	程塚 聡美	小藪由佳子	
客員研究員	綾 牧子	阪本 陽子	清水香保里
	矢作由美子	中川真規子	木場 雪香
	青木 大輔	梨子千代美	三菅 洋輔
	大西 健介	小幡 肇	丸山 悦子
	津村優里菜		

2026年度

所長	手嶋 將博		
研究部主任	萩原 敏行		
研修部主任	小林 稔		
事務	小藪由佳子		
客員研究員	綾 牧子	阪本 陽子	清水香保里
	矢作由美子	木場 雪香	青木 大輔
	梨子千代美	三菅 洋輔	大西 健介
	小幡 肇	丸山 悦子	津村優里菜
	シモン・レジュク	豊田 淳喜	占部 諒
	佐藤 孝憲	新井 日陽	

教育研究所年報 第35号

発行日 2026年5月1日
発行者 文教大学教育研究所
〒343-8511 埼玉県越谷市南荻島 3337
電話 048-974-8811
印刷 有限会社 カワカミ印刷
電話 048-976-0007
